

高き志【こころざし】

地域とともにある

勢いのある学校

No. 34 (R4. 2. 1発行) 文責 校長 福田雅也

愛される為に生まれてきた

以前、この学校便りでも取り上げたことがある「日本一心を揺るがず新聞の社説」という本があります。宮崎の地方新聞である「みやざき中央新聞」の編集長「水谷もりひと」氏が執筆した「社説」で構成された本です。今回はその中の一つ、以前から機会があれば紹介したいと考えていた「愛される為に生まれてきた」という社説を紹介いたします。

最近、「チャレンジ」という新しい英語をメディアでよく見かける。「チャレンジ」とは、障がい者を指す言葉だ。「努力を必要とする」という意味ではなく「神様から挑戦すべき課題や才能を与えられた人」という意味が込められている。

先日、千葉県の幕張で「チャレンジ・ミュージカル」を観た。障がいをもつ人たちが文化・芸術を通して社会参加し、みんなが助け合い、支え合う地域づくりを目指してNPO法人「いちかわ市民文化ネットワーク」が主催しているものだ。

ステージにはダウン症の子、知的障がい児、自閉症の子など、障がいも様々。車いすで上半身だけを一生懸命動かして踊っている子もいた。精一杯の自己表現を彼らは楽しんでた。会場は感動の渦に包まれた。

ところで、ミュージカルが始まる前のオープニングで、年齢からして30代、40代の男女が出てきて歌とダンスを披露した。子どもたちによるミュージカルと聞いていたので、最初、「ん？」と思ったのだが、この人たち、とてもいい表情なのだ。激しい動き、それでいて終始さわやかな笑顔。

途中からハッと気が付いた。「もしかしたらこの人たち、障がいのある子どもたちの親たちじゃないのかな」って。それから舞台を見る目が変わった。普通だったら我が子が劇に出ると、舞台の袖で陰ながら応援するとか、客席からビデオカメラを構えて見ているものだが、彼らは我が子と一緒に舞台上に立っていたのだ。みんなとても仲が良さそうである。きっと日常生活の中でも彼らは支え合い、助け合い、励まし合い、そして共に泣き、共に笑ってきたんだらうなあと思った。

エンディングでは何人かがマイクを持ってこんなメッセージを送っていた。「子どもが産まれたという喜びと同時に、お医者さんから『お子さんには障がいがあります。一生治りません』と告知され地獄に落とされました。一緒に死のうと思ったこともありました。」「この子は何の為に生まれてきたの？ってずっと問い続けてきました。ある日、分かったんです。この子は愛される為に生まれてきたんだって」

「あの子は私をいろんな色に塗ってくれました。そして私はたくさんの優しさと出会いました。ありがとうございます。」

「今、あの子の障がいは愛に満ち溢れています。今、障がいをもっている小さなお子さんを育てている親御さんに伝えたいことがあります。障がいのある子どもを育てるってまんざらでもないよ。」

実は、私の義弟も知的障がい者だ。今は40代後半に差し掛かっているが、ミュージカルをやるなんて、彼が育った時代には考えられないことだ。義母や妻の話によると、彼の子育ては本当に大変だったそうだ。育てるだけで精一杯。将来のことを考えると暗い気持ちになる。そんな家庭に精神的なサポートはなかった。

「まんざらでもないよ」と言えるようになるまでに、どれほどの歳月が必要だったか分からないが、きっと彼女は同じ境遇の親たちと出会い、同じ悩みや悲しみや絶望感をぐりぬけて、ようやく「共に生きよう」という気持ちになったのだろう。

そういう人たちの輪が少しずつ広がっていけば、本当の意味で助け合い、支え合う地域社会ができると思う。

内容を要約して伝えようと試みましたが、どこを抜いてもうまく伝わらないように感じたので、今回はそのまま掲載しました。きっと、保護者の方々にも何かを感じていただけるのではないかと思います。「障がいのある子の親御さんの気持ち」や「共生の大切さ・素晴らしさ」等、私もいろいろなことを感じたのですが、強く感じたのは、「『愛される為に生まれてきた』…なんて素敵な言葉だろう。障がいの有無に関係なく、すべての子どもたちに降り注いでほしい言葉だ。」…そういう思いでした。